

総評 2020.11月分 杉本真維子

今月の佳作からいくつか紹介します。

「呼んでみただけと言われて／呼び返す／世界が一枚の布みたい」（阿部圭吾）  
（千葉県）

関係性で満ちた「一枚の布」の手触りや手ごたえが、鮮やかに立ち上がる。

「珈琲をこぼした時に／君の言う／すごくきれいな川を見たんだ」  
（青木雅）（埼玉県）

こぼした瞬間の驚きと揺れる液体。新鮮な二つの瞬間が重ねられ、川ができあがっている。

「爪が折れ血の滲む／左手のおやゆびに／窓辺で星を見せてやる」  
（春町美月）（大阪府）

「おやゆび」を他人事ように捉える、という遠さがいい。“わたし、は、これくらい突き放した位置から見たほうがつかまえやすいと思う。

「自然観察部の息子を持つと／玄関が川の匂いがする」（板倉萌）（兵庫県）  
玄関に川がそのまま持ち込まれたかのようなリアリティ。なぜかはわからないが、「自然観察部の息子」という部分が効いているのだろう。

「人差し指が私をささないように／沈めた場所を／誰にも知られてはいけない」（梁川梨里）（群馬県）

“秘密、を別の言葉に言い換えればこうなる、という確信のようなものを覚えた。息つぎに強い説得力が滲んでいる。  
それでは、来月もお待ちしています。